

日本倫理思想史上の中世

伊 東 洋 一

「中世」とは何か、それを日本の倫理思想史の上で考えてみたい、というのがわたしのねらいです。

ところで「中世」というのは時代の区分上のことでしようから、日本の中世という場合あるいは西洋の歴史上の時代区分の適用ではないかとも考えられます。がそうでないのかも知れません。それにしても、「中世」という以上西洋史上のそれとの類似が考えられてしかるべきでしょうし、また中国史上の「中世」とどう関係するのか、「中世」という以上等しく何か共通するものがなければならぬとも思われます。こういった視点から問題をとり上げることも可能でしょう。というより、こういう視点でこそ日本の「中世」が位置づけられ、真に日本の「中世」が問題とされたといえるでしょう。

しかしここではそのような巨視的な世界的視野ではなく、日本の「中世」が何よりも歴史上の一時期として、普通鎌倉、南北朝・室町、戦国の時期を指すとして、それに限ってその時期の特徴は一体いかなるものか、「中世」とは端的にどういうことなのかを、「中世」が始まったと見られる時点に、つまりここからは既に古代ではないといわれるような時点に捉えてみようと思うのです。勿論時代と時代との間には過渡期といわれる時期があつて、その時期にはこれまでの時代のものとなつてない何か異質なものとが並存するということがありましよう。そしてそのそうでない異質なものが次第に成長して次の時代の主流となれば、それこそ次の新しい時代の特徴的なものといえるでしょう。それが捉えられればと、そのような方向で考えてみようとするのです。

—

さてそれでは「中世」の開始、展開がどうかたちで意識されていくのかという問題で、古代末から「中世」の初期の頃をとり扱っているとされる文献を手がかりに見ていきたいと思います。

その場合よく引かれるのは、『今昔物語』の「源頼信朝臣男頼義、射殺馬盗人語」という説話です。この説話を有名にし注目すべきものになっているのは、評者達が等しく述べている、二人の武士（頼信頼義親子）の事件を処理するに当つての電光石火ともいふべき実なきびきびした行動であり、更に家来たちまでが一つの集団となつて事件を乗り切ろうとしていること、それを作者が武士社会の新しい人間関係として新鮮なおどろきで生き生きと語っているという点でありましよう。事実馬が盗まれたという騒ぎと同時に寝所にあつた親子の武士はもう馬上の人となつて盗人を追っているという敏速さ、

月もない暗闇の中を突走っているこの親子の武士は「我が子は必ず追ってきている」と思い、他方は「我が祖は必ず先を追っている」と思っている。ようやく盗人に追いついて、盗人がもう大丈夫と安心して馬に水を飲ませ一息入れて水際を歩いている水音を聞くと、「まるですっかり打合わせができてしまった」に、実際は暗くて子の頼義が後にいるかどうか分らぬのに、『射よ彼れや』といって子供に射させ、手ごたえがあったと知ると後は家来たちに任せさっさと帰って寝てしまふ、といった描写に評の適切なことを読みとることができるのであります。『今昔物語』の編者は源隆国（一〇〇四―一〇七七）といわれ、また異説もあつて確實ではありませんが、貫して武士に優越しているという姿勢がみられるところからも、おそらく貴族階級の人であろうと考えられておるものですが、またそこに自分たちとは違った人間の出現に驚いていることは「恠き者共ノ心バヘ也カシ。兵ノ心バヘ（武士氣質）ハ此ゾ有ケルトナム語り伝ヘタルトヤ」とこの説話を結んでいることにも知られるところです。

この説話集は編者が今日尚確實ではありませんが、その成立は凡そ十一世紀末から十二世紀前半と見られるもので、そうしますとこの時期に従来と違った何か異質なものとして現われてきたものは、武士（「兵」）という新しい人間、そして武者氣質（「兵ノ心バヘ」）といったエートスが大きく浮び上ってきた一つといつてよいのではないかと思います。

そこで次にこの「武士」という人間を考慮しながら、これは作者も成立年代もはっきりしている『方丈記』をとりあげてみようと思います。この随筆は、作者鴨長明（一一五三―一二一六）が物心がついてから凡そ四十年間をふりかえつてみて、「世の不思議」を経験したことがしばしばであったということを、この書を有名にしている「ゆく河の流れは絶えずして……」という冒頭の言葉に続いて述べているものであります。ところで長明が経験した「世の不思議」というのは、一・七七年の京都の三分の一を焼きつくした大火と一一八〇年の京都の旋風であり、一一八一年から翌年に及ぶ飢饉更に一一八五年の大地震などであります。かれはこれらの自然現象や社会現象にわたる事件を記述するのに、例えば大火について「人のやることはすべて愚劣につくるのだが、京都のような危険な町に家をつくるといつて財貨を費したり心を配ったりすることは『すぐれてあぢきなく（愚劣）待る』」といつて終始隠者として客観視する姿勢をとっているのですが、旋風を述べているところでは「辻風は珍らしいものではないが、ただことでない、こんなことがあつてよいものだろうか、『さるべきものさとし』ではないかと疑った」というのです。長明はこれらの事件を通じて「さるべきものさとし」つまり何か神仏のお告げなのではないかと考えている。このように長明はこれらの出来事を何かの前兆とうけとっていることは注意されてよいように思われます。それでは一体何の前兆なのでしょう。

京都の旋風は長明によると治承四年の四月のころとありますが、歴史年表を見ますと、それから間もないと思われる五月には源頼政が以仁王を奉じて挙兵し宇治に敗死するという事件があり、更に六月には清盛による福原遷都、八月には頼朝が伊豆に挙兵し石橋山に敗れるということがあり、九月には源義仲の信濃挙兵、富士川の戦は十月というふうに、この一一八〇年という年はようやく源平二大武士集団の角達が松舞台に登場してきたことがはつき

りと印象づけられる年であります。保元・平治の乱はこれより既に二〇年も前の事件ですから、長明がとりあげている時期はいわば源平争乱の前夜といつてよいでしょう。長明はしたがって古代王朝体制が崩壊していく前ぶれと見たといつてよいのではないのでしょうか。

そこで、ここで奇妙なことは、長明は隠者ですから問わないとしても、当時の貴族や歌人等の凡そ文学者や記録者がこの大動乱を殆ど伝えてない、少くとも今日のわたしたちの前に遺してないということです。その理由は隠者も含めて貴族や歌人等が新しく登場してきた「武士」に対して抱いた考え方、とった態度に関係していると説明することが最もよいと思われます。つまりかれらは一様に、武士を教養も何もない田舎者としか見ず、したがって無関心乃至は無関心的態度をよそおっているのです。かれらの関心は花鳥風月にあったのです。そのことを先ず隠者を代表させて再び長明にみてみましょう。かれは遷都なった福原を訪ねます。そこでは牛車に乗るはずの人は馬に乗り、衣冠待衣をつけるはずの人が武士のような直垂をつけてすべかり京の風俗が変ってしまったことに驚いて、「これではまるでいなかっへの武士と違いはしない、こんなことは乱世の前兆と聞いていたが全くその通りだ」と感懐を述べているのです。

次に当時有力者であった貴族の九条兼実はこの福原遷都を「物狂いの世」と見ており、頼朝の伊豆挙兵や維盛の追討軍を率えての福原進発に乱れ飛ぶ流言飛語に周章しておる様子が日記『玉葉』からうかがわれます。このような貴族の態度を典型的にあらわしているのは清原頼業（一一二二～一一八九）でしょう。かれは平安末期の儒者（明経博士）ですが、関東の兵乱や叡山の大衆の動きに対して、白髪のかたしはひたすら中国書の校訂をやっており、これは杜預が襄陽の地でやったと同じ気持である」と、アウトサイダーの姿勢を打出しているのです。

十九才の藤原定家（一一六二～一二四二）は征東軍の出発を目前にして「世上の乱逆追討、耳に満つといへども、これを注さず、紅旗征戒は吾が事にあらず」とその『明月記』に記しておりますが、若き定家のこの気負った言葉にも藤原一門の新興武士に対する感情がありとうかがえるように思われます。つまりこれまでいわば顔使していた荘園の番人らが急に成り上って貴族面をしている。平家の公達など自分には関係がない、というのであります。凡そ貴族、教養人一般の源平争乱に対する態度はこのようなものであったのでありましょう。だからこそ、自分の境涯や生活を歌にした建礼門院右京大夫や頼朝に答えて歌の「奥旨を知らず」といいえた西行が特異に見えるのは、歌会や贈答のための歌と心得、作歌の秘訣や奥義をのみ問題にしていた当時一般の歌人から余りに距っているためではないでしょうか。源平争乱を歌にしているのは、大争乱をよそごとにするのでなく、かえってそこを突きぬけるところにひらけてくる自由の境地に立つことによってのみ可能であるといえるように思われます。

とに角このように見てまいりますと、武士の誕生、形成されていく武士社会というものがわたしたちの注意を強く引くことは今更疑いのないところといつてよいように思われます。

さて武士社会の形成は班田制度の衰退と荘園の勃興と関連するといわれます。荘園の成立は墾田の私有権が認められた天平十三年（七四三年）にまでさかのぼりますが、武士社会を産み出すに至った荘園の成立は藤原氏専権時代以後と見られます。実際藤原氏は荘園経営に熱心で、藤原氏の勢力はこの成功によって得られたといわれております。荘園は国衛使不入の地、私有地でありますから、荘園の経営は公田公民の立て前をくずし、国家の統制力を弱めることによってなされることになり、したがって藤原氏の勢力の伸長と並行して地方の秩序が乱れていくこととなります。ところで荘園は国家の保護を全然受けないのですから、跋扈する盗賊のみならず土地侵略を企てる近隣の荘園に対しても生活の安全を自分で守らなければなりません。こうして荘園は次第に実力つまり武力的な自衛団体と化し、東国では平将門の乱（九四〇年）頃から緊密な防衛団体を形成していたと見られます。

「緊密な防衛団体」とはそれではどういうものかと申しますと、例えば原勝郎博士が推定しているところから見ますと、在地の荘官たる豪族の住居は普通山岳丘陵を背後にして平地田圃を前にした場所にあつて城戸と櫓を具えた一つの城砦をなしていて、附近には服属している家の子郎党、百姓の家があつた。そして一旦事があるとこの部落に合図し馳せ集つた家の子郎党によって城を守る。その戦闘は騎馬で弓を射、矢戦の後は短兵で迫る。集る家の子郎党の数は一定しないが三、四に達することも稀でない。しかもかれらはその主に対して身命を捧げるといふのであります。このことは先の『今昔物語』の数多い物語や戦記物に裏づけられますから、事実そのようであつたといつてよいと思われまゝ。

ここでその家の子郎党であります。、その出自は不明であつて、あるいは昔の家人奴婢の変形ではないかともいわれますが、少々ともこの段階では身命を賭して主を守るといわれたように、確かに主に隸従しているのに間違ひはありませんが、それを圧力に屈服してそうするのでなく、自ら好き好んで献身的に振舞つてゐる、更にいえば、領主の指導や統率に感謝し恩愛を感じてそうしていると見られるのです。ですからこの防衛団体は当初から主従団体として出てきたのであつて、戦友団体としてはなかつたといふことができます。それではそのような緊密強固な主従の結びつきはどうして成立してきたのかという問題になりますが、領主が中央の名家の子孫であるといふこともあるでしょう。しかしそれだけではこの防衛団体としての荘園とやや性格が違ふと考えられる寺社や公郷たちの荘園と変りありません。これらの領主こそ国家権力や社会的地位をその背後にもっている存在だからです。ですからかれらはそれだけでなく、在地の領主として実際にその土地にあつて荘民と生活を共にし、その優秀な知力、武力をもって荘民の生活を安全にしその過程のなかで荘民を指導し統率し組織づけた、要するに荘民と生活と防衛を代々に共にすることによって緊密な共同体をつくりあげた、と答えることができるように思ひます。そこでその関係は恩愛関係であつたといえます。二、三百人から三、四百人の家の子郎党というのは丁度一人の人間が統率できる範囲、一人の人間の人格的影響力が徹底する限界とも見られるからです。そしてこのことは中央に名を知られている武將と郎従（荘園領主）の関係に当てはめてそのように考えられるのです。在地の領主としての武士とその家の子郎党の関係と中央の武將とその郎従としての荘園領主との関係は簡

単に同一視できないといえるかも知れません。しかし公郷と莊官、莊官としての在地の領主と莊民という系列とははっきり違うということはいえると思います。中央にあって名の知られた武將と直接家の子郎党、四百人を率いる在地の領主としての郎従との関係は、武將がこれらの個々の武士団を連合させることに偉大な優秀な統率力を發揮することによって生まれたものであり、武士団内部の関係と確かに違うと考えられますが、しかしその関係は決して浮き上った存在でなく、領主としての武士と家の子郎党の緊密な強固な結びつきをそこに持ちこみ、この結びつきにのみ生きていたといえるように思います。武將と郎従の関係については比較的資料が豊富ですので、これを手がかりに武士団内部の主従関係をも類推し一般に武士社会におけるエートスを考えてみましょう。

平の忠常の乱（一〇二八―一〇三二年）から前九年（一〇五六―一〇六四年）、後三年の役（一〇八三―一〇八七年）の内乱を通じて源氏が東国において次第に強固な地盤を築いていったのですが、この内乱鎮定に当って国家の軍隊は殆ど役に立たず専ら武士団の力によったのであって、しかもこの武士団を連合せしめて更に大きな統率力を發揮したのが源の頼信とか義家とかである訳です。かれらはしたがって個々の武士団の長としての領主を郎従としている点でより高次の統率者であり、これが武將といわれるものです。さてそれではこれらの武將とはどういう存在であったのでしょうか。いまこの内乱鎮定の立役者源義家に例をとってみましょう。

まず義家の名声が高くなるとそれに並行して諸国の土地所有者からその領地の公駈を寄附することが多くなって、余りそれがひどいのでついに宣旨で禁止されるほどであったということです。このことは武士団を率いる莊園領主が義家に服属したこと、義家の郎従となったことを意味するといつてよいでしょう。そしてこの武將と郎従（莊園領主）との関係は、莊園所有者が権門勢家に土地を寄附して莊官となることによって生じた権門勢家と莊官との関係とは丸で違ったものののです。それは公郷と莊官との関係には見られない新しい独特な関係なのです。それこそ恩愛を中心とした主従関係なのです。

義家は後三年の役後間もない頃弟の義綱と仲違いし戦いにまで発展しそうになったのですが、それは二人のそれぞれの家人の所領争いに原因しているのです。この場合武將と家人の関係は兄弟の関係より大きい、その結びつきは親族的結合より強いといえないでしょうか。武將の側でこのような態度つまり兄弟の情をも捨て身命を賭して家人を庇護することになれば家人もまたその恩顧に感じて主のために身命を賭することになるのは当然と思われるのです。このような恩愛を中心とした主従関係は今見た武將と家人の間だけのものでなく、そっくり在地の領主とその家の子郎党の関係でもあったといえるように思われます。それにしてもそのような主従関係は生活を共にすることによってのみ可能であると思われるのに、武將は京都にあって直接生活の共同ということはないという疑問が投げられるかも知れません。しかし武將は京都で生活していることは確かですが、京都にあって地方を知らず一切を莊官任せである公郷とは違い、したがって武將と在地の領主としての武士との関係は公郷と莊官との関係とは全然異なるのであります。そのことを義家の場合で見してみましょう。

義家の家人で美濃の領主が近隣の武士に恥辱を受けた。そのことが京都にいる義家のもとに飛脚で知らされた。丁度この時義家は父と共に法会に参列していたのですが、この知らせに義家はそっと座をはずして家に帰ると直ちに馬を駆って美濃に向った。家を出る時は只の三騎がついてきたに過ぎなかった。翌日未明美濃に着いて相手の武士に押し寄せた時でも只の二十五騎にすぎなかった。家来達が後を追う余裕もないほどその行動が迅速なのであります。義家は地方の家人に事があると聞くと、恰も京都の中の事件を解決するように、あつという間に処理してしまっているのです。武将は離れて京都にあつても地方にある家人との関係はこの例の示すように緊密な連絡があり、且事があれば即座にその土地に現われ家人と一緒になって戦い、そのような意味で生活の共同を得ていたのであります。

この武将と家人の関係は「乳母」の現象からもアプローチ可能でしょう。原勝郎博士の論証するところですが、乳母とは武将の郎党の娘があたり、したがって乳母としての情愛の他に自分の親兄弟が仕えてきた、また使えている主君の子であるという結びつきのなかにおるのです。このことは義経の身代わりになって戦死した佐藤継信が乳母子であるといわれたように、戦記物に乳母や乳母子の話がしばしば出てきて示唆してくれます。主従間の関係は世襲であります、それが単に身分的な世襲であるだけでなく、情愛的関係の世襲でもあると考えざるをえません。

確かに、主従関係における恩顧と奉公とは常に交換関係にある、取引関係だ、雙務的義務だ、主君の情という非経済的な恩でなく反対に経済的利益だ、一方的な忠誠で強制的に結ばれた農奴関係の反映だ、とかこれまで見てきた考えとは反対の意見があります。しかし戦記物の「弓箭に携わるの習は横心無きを以て本意とす」（『吾妻鏡』）とか「就中弓箭馬上に携わる習ひ二心あるを以て恥とす」（『平家物語』）とか「坂東武者の習、大將軍の前にては、親死に子撃たるれども顧みず、弥が上に死に重つて戦ふとぞ聞く」（『保元物語』）とか「坂東武者の習として父死れ其子顧みず、子討れども親退かず、乗越乗越敵に組で勝負するこそ軍の法よ」（『源平盛衰記』）といった言葉に見られる主従関係を、身命を賭した情愛的関係を基礎とするとみたいのです。それは「献身の道德」（和辻哲郎博士）といつてよいでしょう。鎌倉仏教の成立はわが国思想史上の画期的事件ですが、この鎌倉仏教の中心思想が「慈悲」にあるとしますと、武士的社會の成立と並行しながら次第に形成されてきた鎌倉仏教の慈悲が献身の道德と関係づけられてこそ最もよく理解されると思われるのであります。

（昭和四十三年四月二九日 弘前大学哲学会公開講演）